

<論文>

東日本大震災と人間環境論

杉田 正樹^{*1}

The Tohoku earthquake and the Thought of human environment

Masaki Sugita^{*1}

On March 11th 2011 a huge earthquake hit the Tohoku district of Japan resulting in brought serious damage. The earthquake has been shown to have destroyed the Fukushima nuclear power plant. As a result The high-level radioactive material was, and continues to be emitted into the air, the groundwater and the Pacific Ocean. The nuclear accident power plant is still unfortunately in progress.

This earthquake-caused tragedy has presented us with philosophical and ethical problems to consider. In this paper, the pettiness, weakness, and helplessness of human being is treated first, and, oddly enough, human arrogance backed by progress in technology is then discussed.

To think these problems we must consider the environment and history of Japan and Japanese appreciation of what is called “fudo”. From here we review notions of Mujo (Mutability) and then to the important attitude of “listening to (ver-nehmen)”, that comes from Heraclitus, the ancient Greek philosopher, who emphasized the importance and difficulty of listening the voice of Logos.

* 1 Kanto Gakuin University; 1-50-1, Mitsuurahigashi, Kanazawa-Ku, Yokohama 236-8503, Japan.

key words : 東日本大地震 (the Tohoku earthquake)、人間環境論 (the thought of human environment)、人間の傲慢 (human arrogance)、人間の卑小 (helplessness of human being)、聴くこと (Ability of listening-to)、ヘラクレイトス (Heraclitus)

はじめに

今年、2011年3月11日、東北地方の太平洋岸に巨大地震が起こり、甚大な被害を与えた。内閣府の調べでは、7月14日現在、死者1万5597人、行方不明者4980人、避難者9万1552人という。

しかし、被害はそれだけではない。福島第一原発は、絶望的な状況を呈している。地震で冷却系統が故障し、その後の津波で、完全に破壊された。その結果、1号炉から3号炉まで、炉心が空だ

* 1 関東学院大学人間環境学部人間環境デザイン学科；〒236-8503 横浜市金沢区六浦東1-50-1

き状態になり、メルトダウンが起こっていることを東電と政府が認めたのだが、それは、地震から2ヶ月以上たってからのことである。政府は当初、事故の規模をレベル4と言っており、最高度のレベル7であると認めたのは、4月12日のことである。現在、福島は、あの25年前のチェルノブイリの事故の規模を近々超える、ないしはすでに超えているとも言われている。というのも、いまだ収束の見込みが立っておらず、進行中だからである。

ここには実に様々な問題がある。本稿でのわれわれの関心は、地震と原発事故がわれわれにつきつけた文明的問題を考えることである。それは、われわれの従来の考え方、生き方、総じて価値観の見直しを要求しているように思われるからである。これを「人間環境論」として考えてみたい。結論を簡単に述べれば、「人間環境」という概念は、文明史を考えると、格好の中心概念であり、それを体した「人間環境学部」の果たすべき役割はいよいよ大きく、かつ重要となった、ということである。

そこで、まず、地震について述べ（第1節）、次に原発事故にかかわる問題点を指摘したのちに（第2節）、最後に、人間環境論について見通しを与えることにしたい。（第3節）。

第1節 地震がわれわれに教えること

自然の威力と人間の無力 大地震とそれに続く大津波は、自然の猛威の圧倒的な力をわれわれに思い知らせたのであった。被災地の情景や、ビデオに記録された津波の猛威は、それを一度見た者に、生涯忘れることは出来ない深い記憶を刻み込んだ。一言でいえば、それは自然の、過酷で、抗うことのできない威力である。

「自然に優しく」の欺瞞と傲慢 それは、また同時に、人間の無力と、卑小を思い知らせたのであった。日頃耳にする、「自然に優しく」だの、「地球に優しい」だの、といった物言いが、何と傲慢で、欺瞞的であったか、われわれは思い知ったのである。別段、自然も、地球も、環境も、人間に優しくしてもらおうなどは思ってもいない。自然は、自ずから然るようになるのである。為すように為すのである。それを、「優しく」とか「優しい」などというのは、傲慢でなくてなんであろうか。また、それが欺瞞であるのは、自然に優しくの内実が、本当は人間自身にとって好都合ということではないからである。要するに、自分が豊かで、便利で、快適な生活を送るためではないからである。

謙虚であること ついこの間まで、人は、恵みを与えてくれる自然に感謝していた。自然に対して恩着せがましいことを言うものはいなかった。恵みに対しては、ありがたいと礼を言っていた。感謝の気持ちを祭りや儀式を通して表したのであった。また、ひとに施す行為についても、「情けはひとのためならず」、と素直に、それは、回り回って自分のためだと認めていた。恩着せがま

しく、相手のためだ、などとは考えなかったのである¹⁾。

科学が傲慢の原因か では、人は、なぜそうした美風と謙虚さと率直さを失い、度し難く傲慢になったのであろうか。理由としてまず思い浮かぶのは、科学・技術の発展であろう。実際人は、科学の発展によって、自然に潜む真理を、あるいは夥しい知見を手に入れてきた。人間の理性に対する確信と自信は、科学の進歩によっていやが上にも強化されてきたと考えられるからである。

しかし、かつてはニュートンがそうであり、また、近くはアインシュタインがそうであったように、科学者たちは、誠に謙虚であった。彼らは自然がまだ秘匿している真理を求めて苦闘し、他方自然は、その挑戦を拒み続けているからである。従って、彼らは、自分の知り得たことは、自然のごくわずかのことに過ぎないことをよくわきまえていた。知れば知るほど、ますます謙虚となり、自然の奥深かさ、美しさに気がつき、畏敬の念をいただくようになった。天才のかれらがそうであるとすれば、一般の科学者たちが、天才よりも傲慢でいられるはずはなからう。

技術の発展が原因か では、何が原因なのであろうか。科学的知見を現実に応用して、人が想像だにできなかったものを現実化した技術の成功であろうか。かつて、技術の偉大さの象徴として、「月に人を送り込んだ」という言い方がなされた。それに先立つ、人工衛星の打ち上げ成功や、有人衛星の成功にも、世界は興奮し、新しい時代の到来を喜んだものであった。今日ならば、IT 技術の進歩には、目を見張るものがある。

しかし、それらが出現し日常的に使えるようになったからといって、人は傲慢になり、また、そうした技術の力を過信したりしたであろうか。第2節で扱う原発について、われわれは、過信し傲慢になったといえるであろうか。多くの人々は、過信とも傲慢とも縁がなく、ただ、便利に使っていただけではないのか。

もっとも、自然を支配し、大量に生産することが出来ることを、無意識的に得意がり、傲慢に陥っている、ということは言えない訳ではない。便利な生活を享受すること自体が、傲慢である、と言うことができるかも知れない。しかし、そう言うことにどれほどの意味があるだろうか。傲慢の原因はもっと別のところに求められるのではないか。

傲慢の原因は何か むしろ、こう問うべきである。誰が傲慢になったのか。なぜ、傲慢になったのか、と。次節での議論にも役に立つので、原発に関する、次のような場面を紹介したい。ひとつは、2005年12月、佐賀県唐津市で開かれた、玄海原発についての公開討論会での議論の様子である²⁾。

1) この印象的な事例を、宮本常一は『忘れられた日本人』のなかで記している。

2) 佐賀県庁のサイトで、「プルサーマル公開討論」に、推進派の大橋弘忠東京大学大学院教授、反対派の小出裕章京都大学原子炉実験所助手らが出席した。この討論の書き起こしを読むことができる。

<http://saga-genshiryoku.jp/plu/plu-koukai/gijiroku-1.html> この映像記録は、佐賀県のサイトでは何故か削除されている。表情や話し方は、文字情報を超えた人格の特徴を際立たせる。2011年6月6日現在、以下のサイトの「1 / 7 [原

この討論会には、推進派の学者と反対派の学者の両者がそろっていた。(行政開催の討論会としては稀有であって、通常は推進派で固め、質問者も推進派で固めて、市民への説明の実績のアリバイを作るのが通例である。) 推進派講師は、反対派の講師が、緊急冷却装置がすべて停止した状況を話すと、ありもしないことを想定して危険だと騒ぐのは詐欺にちかい、といったような発言をし、また、プルトニウムの危険性に触れると、体内からすぐ排出されるので、飲んでも平気だと断言したのであった。また、プルトニウムで一人でも死にましたか、科学的証拠がありますか、と逆に追求したのであった。反対派の講師が、統計的な因果関係の解明には、時間がかかると言うのと、終始一貫して鼻で笑っていた賛成派講師は、軽蔑した顔つきで、それ見たことかと冷笑し、勝ち誇った表情を見せたものである。かれはまた、市民の質問についても、そんな嘘をどこから手にいれましたか、と反問し、まともに答えようとしなかった。ところが、今、まさに、反対派の心配した当のことが起こったのである。推進派の講師のこの傲慢は、何に由来するのか。それは、この人物の個人的な事情には解消されない背景があるはずである。

もう一つは、次のような例である。1983年1月26日石川県羽咋郡志賀町で開かれた『原発講演会』(地元の広域商工会主催)での高木孝一敦賀市長の講演内容である³⁾。原発が如何に儲かるか、という話を延々としたあと次の言葉で締めくくられる。

「……えー、その代わりに100年経って片輪が生まれてくるやら、50年後に生まれた子供が全部片輪になるやら、それはわかりませんよ。わかりませんが、今の段階では[原発を]おやりになった方がよいのではなからうか…。こういうふうに思っております。どうもありがとうございました。

(会場、大拍手)」

この演説の効果であろうか、志賀町でも、原発が誘致され、建設されたのであった。

ついでに、もう一つ紹介しよう。第8代内閣府原子力安全委員会委員長、斑目春樹氏へのインタビューと、先に紹介した小出裕章氏へのインタビューである⁴⁾。ここで斑目氏は、実にあっけらかんと、「[放射性廃棄物の]最後の処分地は、最後は結局、お金でしょ」、と語っている。すべては金で解決するという思想の持ち主であることが、その自信に満ちた話し方からうかがえる。これに対して小出氏は、「自分が原発に反対する本当の理由は、自分だけがよくて、危険は人に押しつける社会が許せなかったからです」、と述べている。コメントは不要だろう。両者の話し方そのものを見ていただきたい。これが原発の実態である。

権力と情報 彼らに共通するのは、彼らが、権力の持ち主であるか、権力に近い人間である、と

発問題] 推進派 vs. 反対派」で見ることができる。是非ともご覧いただきたい。なお、このサイトには、小出氏による、プルサーマル発電に関する説明の記録があり、これも一読をお勧めする。

<http://blog.livedoor.jp/amenohimoharenohimo/archives/65720917.html>

3) 内橋克人『日本の原発、どこで間違えたのか』朝日新聞出版、2011年、第5章「なぜ原発を作りつづけるのか」

4) http://www.youtube.com/watch?v=AksrgkxQ7pA&feature=player_embedded#at=16

いうことである。言うまでもないが、傲慢の源泉は権力である。むろん、すべての権力者が傲慢であるとは限らない。そのことは、しかし、権力が人を傲慢にすることを否定しない。また、権力は金を結果する。地位や力を示す指標の一つはお金である。もちろん、金持ちが常に傲慢である訳ではないし、能力のある者、高い地位にある者が常に傲慢であるとは限らない。しかし、地位や金がか人を傲慢にすることを否定するものではない。むしろ傲慢は、自己の能力や、人間の有限性への反省の欠如、とりわけ同情心の欠如を特徴とする。すなわち、それらは原因でもあり、また、結果でもあると言えよう。この関係は、知が情報と言われるようになって、いよいよ強まった、というのが私の意見である。

情報という商品 　いつ頃からか、情報という言葉が頻用されるようになった。天気予報さえ気象情報といわれるようになっていく。

データや、予測や、学問的知見が情報と呼ばれるようになってから、世の中が大きく変わった。情報をもつ者は、もたざる者に対して優位に立つ。情報の独占者である専門家が、情報を持たぬ一般大衆に優位し、一般大衆は専門家に依存する。こういう構造ができたのである。商品化した情報が、支配—被支配構造を形成し、他方、商品にならない知恵は駆逐され、場所を失う。

メディアの退廃 　メディアは、かつては権威や権力に対する批判機能の故に、第四の権力といわれていた。それは、広い視野から事柄を位置づけ、判定し、解釈することを通じた、権力への鋭い批判機能によってであった。しかし、今やその面影は、わずかの例外を除いて、いまやない。権力からの意図的な情報リークをそのまま伝えるだけの、権力の広報機関に成り下がっているからである。また、広告の媒体になることによって、スポンサーに頭の上がらぬ存在になってもいるからである。

広告と言えば、それ自身何も生産しない職業斡旋業や商品を売るための手段に過ぎない広告会社が力を持ったのも、情報が商品となった時代の象徴的な出来事である。政治もまた、思考力や政策立案能力ではなく、メディアへの露出度で選ばれることとなった。しかしそれよりも深刻なのは、世論が作られるものとなり、有権者が政治家に操作されるものとなった点である。(エマニエル・トッド『デモクラシー以後』藤原書店)。

要するに、情報をもつ者が、力を持ち、有利となり、利益を得るとのことだ。情報をもつものは、もたざる者に対して優位し、支配することができる。それが、情報の所有者を傲慢にする。これが、人間の情けない真実である。権力が腐敗するのも、同じ事情からである。器の小さな人間ほど、腐敗は早い。そして、その権力＝利権にしがみつくと自己目的となる。こうした手合いが重い責任ある地位に就いたとき、困るのは下にいるものである。その実例は、残念ながら掃いて捨てるほど身近に転がっている⁵⁾。

科学的知見が情報＝商品となり、それが金と結びついたとき、科学が変質した。政治家や官僚

が、自分たちのもつ情報が金になることに気がついたとき腐敗が始まった。自己維持を唯一の目的とする「制度」となったのである。要するに、経済が、知的活動、政治的活動、文化的活動を植民地化し、支配する制度となったのである⁶⁾。そのとき、職業が要求する倫理など、消えてしまうのは当然の帰結である。

しかし、こうしたことを嘆くのが本稿の目的ではない。地震で露わになった人間の卑小さ、非力さにもかかわらず、また、人間に希望を持たせるようなこともまた数多く確認された。次にそれを見ることにしよう。

モラルと諦念 今回の震災で、被災地の人たちのモラルの高さが、特に外国メディアによって驚きの目で伝えられた。暴動や略奪が起こらない、お互いに助けあい、励まし合って、過酷な運命に耐えている、支援者をむしろ励まし、支援物資が届いたとき、もっと困っているところへ持って行ってくれと頼む、等々である。実際、彼らの目には、それは驚異と感嘆の光景であり、賞賛に値する出来事であったようだ。そうした中で、全国からあつまった、老若を問わない多くのボランティアの存在や、自衛官、警察官、消防士の方々の、任務を超えた心のこもった活動も、人々を感動させ、人間への期待と信頼を確信させたのであった。また、特に、原発暴走鎮圧のために奮闘した専門職の方々の高い倫理観には、多くの人が尊敬と賞賛を惜しまなかった。

また、国内にとどまらず、世界中に支援の輪が広がり、励ましのメッセージとともに、義捐金や支援物資が届けられたのであった。起こったことは悲劇であるが、それによって浮かび上がったのは、人間の美しい心であった。この世で最も美しいものは、心であると思知らされた。そうした例を、ここでいちいち挙げるまでもないであろう。それらは、ちょうど、昼間輝いていた太陽が西に沈み始めるとき、次第に明るく現われてくる星の光に例えられようか。おそらくいつも目立たぬ形であるはずなのだが、日頃機能しているものが不全に陥ったとき、思いもがけず、その存在が光り始めるのである。

風土とメンタリティ こうしたモラルの高さ、他者を思いやる心、深い諦念と不思議な静かさ、などを、寺田寅彦や和辻哲郎の論考を通して説明することがしばしばなされる⁷⁾。例えば寺田寅彦は、地震や火山の噴火などに触れてこう述べている。

「…日本ではまず第一に自然の慈母の慈愛が深くてその慈愛に対する欲求が満たされやすいため住民は安んじてそのふところに抱かれることができる、という一方ではまあ、厳父の厳罰のきびしさ恐ろしさが身にしみて、その禁制にそむき逆らうことの不利をよく心得ている。その結果として、自然の充分な恩恵を甘受すると同時に自然に対する反逆を断念し、自然に順応するための経験

5) これを書いている2011年7月時点では、民主党が政権政党であり、菅直人氏が総理大臣である、という事実のみを記しておく。

6) この反面が、金になる情報を生み出せない、学問や、芸術的、知的営為の排除である。

7) 「日本人の自然観」『寺田寅彦随筆集 第5巻』岩波文庫所収。和辻哲郎『風土』岩波文庫

的知識を収集し蓄積することに務めてきた。」(寺田寅彦、237ページ)

寺田は、続けて、「この民族的な知恵も確かに一種のワイスハイト [知恵] であり学問ではある」、と述べ、「しかし、分析的な科学とは類型を異にした学問である」、とつけ加えている。日本に西欧的な、対象を自己から切り離して見る自然科学が生まれなかった所以を、風土的条件に求めているのである。しかし、われわれの今の関心からいえば、風土が人々の振る舞いの仕方や価値観を規定するというアイデアとともに、次の仏教について触れた箇所が重要である。寺田は、仏教が日本の風土に適応したことを述べて、こう続ける。

「思うに仏教の根底にある無常観が日本人のおのずからな自然観と合い調和するところのあるのもそのひとつの因子ではないかと思うのである。鴨長明の方丈記を引用するまでもなく地震や風水の災禍の頻繁でしかもまったく予測し難い国土に住むものにとっては天然の無常は遠い遠い祖先からの遺伝的記憶となって五臓六腑にしみ渡っているからである。」(245ページ)

東北の被災者がみせた高いモラルと静かな諦観の姿は、「遠い遠い祖先からの遺伝的記憶」に基づく無常観に由来すると言えるであろう。

和辻は、日本人の精神の在り方を、モンスーン型と呼び、「受容的・忍従的」と特徴づけたのであった。彼は、「水」に注目して、一方で豊かな湿気が食物を恵むとともに、他方、暴風や洪水として人間を脅かすと言ひ、さらに大雪をつけ加えて、自然の過酷さを指摘し、ここから、「豊富に流れ出でつつ変化において静かに持久する感情」や「あきらめてありつつも反抗において変化を通じて気短に辛抱する忍従」(和辻、163ページ)を認め、こうつけ加える。

「…日本の人間は、自然を征服しようとせずまた自然に敵対しようとしなかったにかかわらず、なお、戦闘的・反抗的な気分において持久的ならぬあきらめに達したのである。」(同、164ページ)

和辻は、ここから「やけ」を説明したがっているのだが、その当否は別として、自然の条件が、人々のメンタリティを規定するという点において、しかも、結局は自然に従順に従う忍耐と諦めを日本人の精神的特徴と見る点において、寺田と同じである。

地元に根ざした知恵　しかし、ここからは、静かな諦観は導けるとしても、高いモラルはどうか。私が注目したいのは、テレビで見た岩手県のある地区の姿である。手元に資料がなく、記憶で書かねばならないのだが、その集落では、津波を免れた数軒の家に、被災者が分宿し、さまざま役割をわりあてて復旧活動を開始したというのである。

すなわち、あるお宅を子どものための学校として年寄りが教師を務め、若者は被災した家々の片づけに出かけ、またある者は、食糧や薬品を調達する係に、主婦たちは炊き出しを行う、といった塩梅である。それは、地区の伝統芸能を保存し継承するための組織を元にして作られたということであった。あたかも、伝統芸能の保存は口実で、こういうときのための組織を維持し、訓練することが目的であったのではないか、と思わせるほどであった。伝統の知恵、文化的・精神的遺伝子と

でも言えそうである。東京のスタジオでこれを見ていた人たちが、「これは東京では無理ですね」と語っていたのが印象的であった。

第2節 原発事故について

原発の事故については、多くの人々が認めるように、これは人災である。

ここでは、まず、原発について、以下、必要最低限のことを書いておきたい。その上で、それが社会や人間に与えている歪みについて指摘することにした。

原発の問題点⁸⁾

- (1) 原発は、化石燃料エネルギーの代替にはならない。原料のウランの埋蔵量が、化石燃料に比べて少ないからである。
- (2) 原発は熱効率が悪い。原発は、要するに湯を沸かし、蒸気でタービンを回して発電する。使用熱量は、総量の約3分の1であり、残りは海水などで冷却して廃棄する。廃熱量は、100万キロワットの原発で、7度も高くなった水を1秒間に70トンも(!)排出する。これが生態系を破壊しないはずがない。
- (3) 原発の使用済み燃料は猛毒であり、かつ高熱を発生し続ける。これを何百年、何千年も管理しなければならない。それを処理し、貯蔵する場所は、日本ではまだ、確保されていない⁹⁾。
- (4) 核燃料廃棄物の1つである劣化ウランが、兵器として用いられ、遺伝子破壊という被害を与え続けている。堅くて重くて猛毒であるという特性が、兵器への転用を誘惑するのである。
- (5) 放射性廃棄物の「処理」の一方法として、猛毒のプルトニウムを再利用する「核燃料サイクル」と呼ばれる方式が考えられている。しかし、技術的に困難で、日本以外の国はすべて撤退している。日本も、高速増殖炉の実験炉を作ったが、現在停止したままである。事実上破綻している状況である。しかも1日5500万円浪費しているのである（『東京新聞』2011年7月4日、「こちら特報部」）。
- (6) そのつなぎとして、プルトニウムを通常のウラン燃料に混ぜて（MOX燃料）使用する発電方法が考案され、一部使用されている。その発電機の危険性は、従来型に比べて数倍も大きくなり、また、経済性の点からも、通常の原発よりも劣っている。
- (7) 経済性と言えば、原発の発電コストは、政府や電力会社が示しているより、余ほど高く、し

8) この節のおもだった論点は、小出裕章『隠される原子力-核の真実』創史社、2010年、広瀬隆『福島原発メルtdown』朝日新聞社、2011年、および各種サイトを参考にした。ページ数はいちいち挙げなかった。一読を是非ともお勧めする。

9) 世界では、現在のところ、フィンランドのオンカロだけである。映画『10万年後の安全』は、必見である。

かも使用済み燃料の処理と貯蔵管理の費用、廃炉にする費用、さらに事故が起こった時の保障などが入っていない。原発の電気は決して安くない。ある試算では、火力9.9円、水力3.98円に対して、原発10.69円で、これでも相当低く見積もった数字である¹⁰⁾。

- (8) それだけではない。原発を維持するために、膨大な労働者を必要とする。特に、一般に巨大設備の耐用年数を越えた設備については、危険な作業が増大する。まして、今回のような事故の際には、通常の数百倍の作業員を必要とする。放射線の強いところでは、作業時間は1日、10数分に限られる。膨大な作業員の確保は、現在の喫緊の課題である¹¹⁾。
- (9) 今回の事故が示しているように、事故が起こった際の被害の規模が莫大である。しかも、それは何十年にもわたって、広大な地域を居住不可能にするほどの威力である。交通事故の死者数が約1万人弱だが、誰も自動車の生産や使用を止めないではないか、とか、「フクシマではまだ原発で1人も死んでいない」、といった原発擁護の議論をする人がいるが、ためにする議論である。10年後、20年後に生まれてくる子どもにまで影響があることは、チェルノブイリが教えている通りである。
- (10) 放射線被害に関して、政府や電力会社は、低レベルの放射線は無害だと主張しているが、最近の研究では、むしろ高いという報告もあり、ある閾値以下では無害であるという議論は成り立たないことがはっきりしている。今回、作業員の被爆限度が一気に250ミリシーベルト引き上げられ、また子どものそれも、20ミリシーベルトに指定しているが、無謀な数値であると海外の専門機関からも批判されている¹²⁾。
- (11) 原発依存度が30%近くあり、停止すると電力不足になる、と電力会社は言うが、これは脅しであり、すべて停止しても、ほとんど問題ない。それに、供給が需要を作り出す、という経済の常識もある。
- (12) 原発建設は、実は1980年代で終わり、スリーマイルの事故以来、先進国での新規建設はない。
- (13) 地球温暖化を口実に、原発がCO₂を出さないエネルギー源であると宣伝しているが、最近では、CO₂が温暖化の原因である、という議論は疑問視されている。また、ウランの採掘、精製、輸送、原発建設、そして処理施設の建設などを考慮すれば、CO₂を排出しないとは言い難い。さらに、二次冷却水で海水を暖めていることは、温暖化の無視できない要因である。
- (14) 原発誘致は、地域共同体を破壊する。その地の人間関係に、対立、分断、相互不信をもたらすからである。原発依存の共同体は、自分たちや子々孫々の健康や、生命そのものと引き替えに、贅沢な公共施設を手に入れ、雇用を手にしたのであった。それは生き方、倫理をめぐる対

10) 『毎日新聞』2011年7月21日夕刊、「一番高い!? 原子力発電」参照。大島堅一（立命館大学教授）による。

11) チェルノブイリでは、80万から100万の労働者を必要とした。

12) 欧州放射線リスク委員会（ECRR）科学議長クリス・バズビー英アルスター大客員教授の発言。http://news.livdoor.com/article/detail/5725347/

立である。

(15) 特に、日本は有数の地震国である。立地条件としては最悪であることが今回の事故で証明された。地震学者の多くは、建設許可を正当化するために動員された。

こうして見てくると、原発を作り、使用する合理的な理由は、まるでないことは明らかである。普通の理解力があれば、なぜ、原発のような危険で、採算がとれず、環境を破壊する代物が、クリーンで安くて安全、と誤解されているのか。また、そこまでして、原発をなぜ作り続けてきたのかが大きな謎となるであろう。

原発推進の謎 この謎を考えると、原発が、われわれの社会を如何に深いところで歪めているのか、また、人々の健康だけでなく、心をも蝕んでいるかが明らかとなる。

これについても、箇条書きで示しておく。

- (1) 原発を推進する、強力なコアのグループがいるとしか考えられない。
- (2) そのグループは、強大な力をもっている。そうでなければ、安全でも、クリーンでも、安価でもないどころか、非常に危険な原発を54基も建設し、稼働させることなど出来るはずがない。
- (3) そのコアグループのメンバーの1つは、言うまでもなく電力会社である。しかし、地域独占企業体だとはいえ、9社だけで出来るような話ではない。原発は経営的にリスクが大きすぎるからである。
- (4) それを法的に支えているのが、国政に携わる政治家であり官僚である。原発建設は国策である。電気料金は認可制であり、電力会社は、原発を作れば作るほど儲かるように、経費を電気料金に上乗せできるようになっている。その額は巨大である。許可する者と許可される者の間に、癒着が生じない方が不思議である。表面に出ている政治献金だけではない。また、官僚にとっての天下り先も確保されている。
- (5) しかし、それだけでは、地元や国民の反対を抑えることはできない。そこで動員されるのが、まずは地域の政治家である。彼らは、電力会社から配分される資金にものを言わせて、票を「買う」。その結果、地域の中に、賛成派と反対派の対立が生じることとなる。
- (6) 困窮する過疎の地域の自治体にとっては、雇用が発生し、電力会社からの税も含めて税金が増え、さらに、多様な名目の補助金が増えるので、大歓迎である。こうして、地域は、電力会社への依存がいよいよ強くなり、反対しにくい環境ができる。
- (7) それでも、人の心を金やモノで買うには限度がある。そこで出てくるのが、クリーンと安全と安価であることを説得するマスメディアであり、学者である。原発擁護の特権的学者グループが「原子力村」と呼ばれていることは、すでに周知のこととなった。
- (8) 今回の福島原発の事故で明らかになったように、マスメディアは、政府や東電の発表する情

報を、批判的に検討することもなく垂れ流した。「大したことはない」、「今すぐ被害が出る訳ではない」、「念のために避難してほしい」、と虚偽の楽観論を繰り返し流し続け、しかし他方、重大な危険情報は、完全に隠蔽された。その隠蔽を手助けしたのが、ほとんどのテレビや新聞などのマスメディアであった。

- (9) また、前節で見た学者や研究者も、電力会社の望むことを、大学の権威を最大限利用して、語り続けた。それだけではなく、反対派の研究者を、周到に排除し、あるいは冷遇してきた。反対に、賛成派の彼らには、膨大な研究費が与えられた。
- (10) さらに彼らはまた、政府の諮問機関の委員や、許認可権をもつ委員会のメンバーとなって厚遇された。(これが傲慢の最後の仕上げである。)
- (11) 電力会社は、地域独占の企業体で宣伝など不要であるにもかかわらず、広告費という名目で、膨大な金をつぎ込んだ。マスメディアは、原発に賛成する評論家やタレントをワイドショーなどに動員して、宣伝に勤めさせる一方、反対の意見をもつ評論家やタレントを、厳しく排除した。要するに、産・官・学とメディアが一体となって、原発を推進したのである。「制度」と呼ぶ所以である。
- (12) しかしそれら以上に深刻な問題は、政府が汚染状況を知っていたにもかかわらず、それを隠し、その上、線量基準を事故後、20ミリシーベルトに緩和して、子どもたちや住民に、回避可能であった被爆をさせ、またさせ続けているという点である。チェルノブイリの経過からすれば、10年先、20年先に深刻な事態が生じることは明らかである。それが予測可能であるにもかかわらず放置したのは犯罪である。ここで明らかになったのは、「国家は国民を見殺しにする」、という冷酷な事実である。
- (13) さらにもう一点つけ加えておこう。確かに、危険をまったく顧慮せず、関係者たちが金に振り回されていることはほとんど自明であるが¹³⁾、それだけでは危険なプルトニウムを大量に生産し、所有しようとしたことを説明するには、まだ不十分である。そこには、(1)で述べたコアの部分が、国家として核兵器をもちたいという強い意志をもっている、としか考えられない。それは、徹底して隠された意志である。

以上、原発事故があぶり出した、日本社会における歪みについて、おおよそのことを述べてきたわけである。これらをふまえて、次に、人間環境論に議論を進めることにしたい。

13) 事故が継続中の6月初頭現在、すでに原発推進派の巻き返しが大きくなった。国家戦略室の原発見直しの動きを察知した、経済産業省が、強引に原発死守の動きを開始したのである。

第3節 人間環境論と教育

さて、われわれの議論はここからである。先にわれわれは、3月11日の地震と津波、そしてその後の原発事故が、われわれに、従来の考え方、生き方を変えるよう迫っている、と述べた。この問題を人間環境論は、どう考えるべきであろうか。それを教育においてどのように生かすべきか、それを考えようというのが、この稿の課題であり、この節の目的である。

地震について そのために、簡単に振り返っておこう。大震災は、われわれ人間の卑小さ、非力さを余すところなく暴露した。この事実を前にすれば、人間の傲慢は、みじめな虚勢に過ぎない。その虚勢は、一部のものにおいて、他の多くの人たちの非力と無力を媒介として自己欺瞞的に成り立っていると言いうる。なぜなら、総じて現代人は、自分たちが採用している経済の仕組みによって、常に不満足な状態に陥っているからである。また、われわれ現代人が享受している、高度に技術化された社会は、誰も全体を見通すことができない、複雑で脆弱なものとなったからである。脆弱である、とはリスクが大きいということであり、これは人を不安にさせる。永遠に達成できない不満足や不充足感と、大きなリスクに対してまるで無力である、という事情が、ニヒリズム的な気分を作り出し、社会を染め上げていることは、否定できない事実である¹⁴⁾。

原発について では次に、原発事故は、われわれに何を突き付けたか。それは、原発をめぐる一切が、虚構であり、虚偽であった、ということに他ならない。それが表向き主張していた利点や目的は、いずれも嘘であることが露呈した。その嘘は、別の目的、すなわち核兵器の所有という目的を隠すためのものであった。ただしかし、核兵器の所有がまるで役に立たないことも、今回の事故で明らかとなった。なぜなら、現有の原発は、通常兵器で破壊されるだけで、あるいは特殊部隊によって外部電力を10数時間止められるだけで、核兵器と同じ効果をもたらすことになるからである。原発は、すでに落とされた原爆である。福島原発から放出されたセシウム137の量は広島に落とされた原爆の約168.5発分に相当すると言われている（平成23年8月23日、政府（細野豪志原発担当相）発表）。それを自分で54発も作ったのだ。

しかし、およそ何の益もないばかりか、巨大な災厄であるにもかかわらず、原発は54基も作られた。そこには相当の無理があった。その無理を通すために、それを意志した者たちは、政治や経済の仕組みを利用した。はっきり言えばお金を用いた。しかし、お金を使う者は、お金に使われる。一旦出来上がった経済システムは、自動化し、制度化した。それは多くの有能な人間が引き寄せ、欺瞞のプロジェクトを、自己欺瞞的に遂行せしめた。傲慢な人間が際立つのは、無理な仕組みを遂

14) こうした事情については、拙稿「信頼と不確実性——「ライフデザイン論」とは何か」、『人間環境学会紀要第10号』所収、2008年、13-14ページを参照のこと。

行するためには、まずは自分をだます必要があるからである。かれらの言葉がむなしく響き、道化に見えるのは、そのためである。その代償は彼らが払うべきである。

人間環境論の構図　そこで、人間環境論である。人間環境論は、自動機械化した制度としての原発に携わる人たちを断罪することを目指してはいない。むしろ、そうしたことが起こりうる人間環境の構造や本質を明らかにすることであり、また、出来事が訴えている声を聴くことでなければならない。自然支配が人間支配に及び、合理性の追求が非合理を結果する、というのは「啓蒙の弁証法」の教えるところだが、それを指摘するだけでは不十分である。その先に進むためには、人間環境論が必要である。それは、しかし、出来上がった、固定的な理論ではなく、現実が突きつける問題に応答しながら自らを鍛え、作り出す作業でなければならないだろう。

とはいえ、今まで、人間環境論として、私は、次のことを論じてきた¹⁵⁾。箇条書きにすれば、以下の如くである。

- (1) 環境とは、生物群が生活する場のことである。それは、単なるスペース（空間）ではなく、生き物にとっての領域である。生き物ぬきでは「環境」という語は無意味である。
- (2) 生物群と環境との間には、相互関係が成り立っている。互いに作り、作られる関係であり、長期、短期に双方が変化してゆく。最長期には、進化の過程を挙げることができよう。短期には、生物群の個体数や種類、生活場所などの変化や異動があり、環境の側にも、それに応じて様々な変化が生じる。それを支配している原理は適応である。
- (3) 環境のなかには、大きな循環作用がある。これが、環境を平衡状態に保とうとするのであって、これが機能しなくなったとき、いわゆる環境問題が生じる。例えば、気温を一定に保つために、大気や水の循環が寄与していることはよく知られている。
- (4) 人間は、言語をもつ存在であり、観念世界と現実世界を重ねて生きている。その最たるものが歴史である。どこにもない過去を過去としてもつことによって、人間は膨大な知恵を蓄えている。「人間環境」とは、このような人間が住み暮らす場に他ならない。
- (5) この人間環境は、「個的領域」、「公共的領域」「経済領域」「生態系（自然）領域」の、相互に緊密に関連しながらも、独立した原理によって成り立つ4つの領域の複合体である。ここから、人間環境の複雑性が生じる。環境問題の解決が難しいのはそのせいである。複雑性が、部分的最適を、全体的最適としないからである。
- (6) 特に、経済領域の、他領域への過剰な影響が、問題を深刻化させている。虚偽に基づく原発という制度を駆動しているのは、初発は別として、経済領域であることは、上に見たとおりである。人間はすべてを見通すことはできず、常に不確実性につきまといられるが、その影響が、

15) 拙稿「『領域的人間環境論』のために」、『関東学院大学人文科学研究報 第24号』所収、2001年

技術の巨大化に応じて大規模化するからである。

- (7) これに関連していえば、経済領域が、個的領域である諸個人の精神世界に与える影響はまことに大きい。ニヒリズムの気分の由来は、無論経済領域だけの話ではないが、深刻である¹⁶⁾。
- (8) (4)と(5)から、人類の歴史を環境の面から見直すことも、人間環境論の大きな部分をなす。とりわけ、農業が始まった1万年以降の人類の歴史は重要である。
- (9) それはまた、政治と経済と文化からなる歴史的連続体としての社会における、それぞれの規程力の変化として見るができる。
- (10) また、別の観点から見れば、人間環境は「故郷」の機能をもつ¹⁷⁾。第1節の最後、「地元根ざした知恵」と述べておいたことは、まさしくここに関係する。

以上が、私が考えている「人間環境論」の基本構図であり、4つの領域に関して、詳細な議論がなされ、相互の関係を構造化することになる。また、環境思想の歴史が付け加わる。文明史的思索のための基本枠組として十分役立つことが見てとれよう。

大震災をどう考えるか　しかしここでは、今般の東日本大震災の突きつけた問題をどう受け止めるか、という点に限定して考えることにしたい。列記すれば、(1)人間の卑小さの問題、(2)死の問題、(3)傲慢について、(4)虚偽の問題、そして、(5)未来における「光明」の問題である¹⁸⁾。

まず(1)であるが、有限の人間が無限の観念をもつことができるようになったのは、言語に由来する。言語は否定をもたらし、否定が無限の観念を生じせしめたからである。問題は、それをなぜ、自分に適用するようになったのか、という点である。このとき、絶対者の問題、すなわち宗教が問われなければならないはずである。第一批判で宗教を否定したカントが、絶対者を要請したことが、一つのヒントになろう。

16) 個的領域と公共的領域にまたがる事柄として教育がある。教育課程への経済の強い影響が、どれだけ深刻で大きなものであることか、言うまでもなからう。教育の問題が経済用語や、経営用語で語られる昨今の風潮を見よ。

17) 少々長くなるが、拙稿から引用しておく。「環境」は、もともと「(われわれを)取り囲む世界 (environment, Umwelt)」を意味している。…ハイデガーの「世界-内-存在」をもじって言えば、人間は「環境-内-存在」である。このとき「環境」は、…人間の活動を可能にしているとともに、人間の活動によって作り出されているものでもある。それは、単に物質的な自然を意味するだけでなく、歴史性を帯び、また具体的な文化的形成体をも意味している。個人や集団を拘束するものでありながら、同時に、個人や集団を支え、意味を供給する源泉でもある。…環境において始めて人間は人間として在ることができるのである。…ここから導かれる重要な論点は、「環境」は、…「故郷 (Heimat)」をも意味しているという点である。このことは、「環境」そのものが、根源的な価値的意味合いをもっていることを意味している。人は今日、故郷=環境に対してあまりに忘恩的になっているのではなからうか。」…この意味での「人間環境」概念こそ、今日の様々な問題を統一的に考えるために、また、それらに対して何をなすべきか、という意味での実践的、倫理的な視点を導くためにも、有効である。とりわけ今日、「人間環境」概念は、「統合 (integration)」と「精神性 (spirituality)」を必要としている社会の要求に応える所以であるように思われるのである。

18) 文化人類学者の故梅棹忠夫氏が、壮年期、20巻の「文明の歴史」叢書の最終巻を担当したが、悲観論が強くて執筆を断念したという。残された目次には、「理性 対 英知」に「暗黒」と「光明」が並記されていたが、梅棹氏は、その光明を見いだせなかった、というのである。その理由は、人間の知的好奇心は人間の「業」であり、それがもたらす暗黒は、受け容れるしかないからだという。これはわれわれに残された間でなければならない。

そして、おそらくはニーチェがショーペンハウエルを經由して接した仏教の無常観が関わってくるはずである。あるいは、さらに遡って寺田寅彦の言う如く、仏教を咀嚼せしめた「遠い遠い祖先からの遺伝的記憶となって五臓六腑にしみ渡っている」「天然の無常」が考慮されるべきであろう。こうした風土に根ざした知恵を、われわれはもっと評価するべきではなからうか。それは、そのまま(2)の死生観にヒントを与えるはずである。一瞬の、夥しい死を目撃したわれわれは、生命がさらされ、かつ本質的に属するはずの偶然性から目を背ける訳にはいかないであろう¹⁹⁾。

(3)の傲慢については、すでにソクラテスが闘い、かつ敗れ去ったものである。「無知」の自覚の教えは、傲慢の前になすすべがなかった。弟子のプラトンは、イデア説をとらえて知りうるべきものとしての真理としての存在を主張し、他方、日常世界を虚偽として退けた。しかし、これは、徹底して懐疑の道を歩もうとしたソクラテスの道の仕上げであったらうか。むしろ逸脱ではなかったか。それよりも、ストアを排してあくまでソクラテスにつき、また懐疑論者の衣鉢をついだモンテーニュに、ヒントを求めるべきではなからうか。そう言えば、「死は目的ではなく終局」にすぎず、「自然に従って来るものは愉快なはずである」、とするかれの死生観は大きな慰めを与えるはずである²⁰⁾。

(4)については深刻である。世界の内部の部分的な虚偽については、喜劇であることに間違いはない。かわいいものである。しかし、人間世界の文化的構築物の一切が虚構であり、虚偽であるとしたら、そのようなことが論理的に可能であるのかどうかは問わないとして、深刻な問題であることは間違いはない。ニーチェが悩み、攻撃したのも、この事態であったと思われる。そして、かれは決然と引き受けるという覚悟の問題へと「解消」したのであった。ここには、光明はない。覚悟がもたらす高揚した気分があるだけである。

これにたいして、もう少し別の観点から考えたい。一つは、かつて拙稿「信頼と不確実性」で略述した議論である。そこでは、こう書いておいた。

「人は、生物としては無目的の存在だとしても、そこには、他者を喜ばせることによって自己が快＝善を得るといふ、おそらくは動物にもインプリシットな仕方で備わっている仕組みが、人間にはイクスプリシットに働いているという事実である。これは事実性として、人間に善きものの生物学的根拠を与えているのではないか、と思われるのである。この点で、哲学と協働しながらも、哲学の思弁を超えて、事実の方へと大胆に一步を踏み出す必要があるだろう。哲学の豊かな思惟の蓄積は、この一步を踏み出した後でも、大いに役に立つと思われるのである。」(14ページ)

聴くことの重要性 第1節で、真に美しいのは心である、と語った。その根拠をなすのは、この

19) 良寛が、文政十一年三条の大地震の後、知人への手紙で書いた、「災難に逢う時節には、災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがるる妙法にて候」、という言葉の意味も、改めて考えるべきであろう。

20) モンテーニュ『エッセー』「経験について」(岩波文庫版、第6巻、184-5ページ)

生物次元にまでさかのぼることのできる事実ではないであろうか。過剰で破壊的な懷疑ではなく、生物であるという次元に定位し、言語を用いるという人間の絶対条件から出発することである。

そこから導けるのは、「聴くこと」の重要性である。では、何を、どのように聴くのか。なぜ、それが重要なのか。これらの間には、聴く対象を示すことによって答えることにしよう。

無論、人は他者の声を聴くのである。では、この他者とはだれであり、何であるのか。まずは人である。子どもであるか、親であるか、友人であるか、顧客であるか、患者であるか、教師であるか、生徒、学生であるか、ともかく多様である。しかし、聴く相手はそれだけではない。自分の心、自分の身体もまた、聴く対象でなければならない。

それらは、しかし、まだ、人間に限定されている。われわれは物の声を聴いているか、自然の声を聴いているか、生態系の声を聴いているか、顧みて忸怩たる思いはないか。ヘラクレイトスは、「ロゴスの声を聴け」、と言った。預言者たちは、神の声を聴けとよばわった。ソクラテスはダイモンの声を聴いたという。今のわれわれならば、地震の声を、津波の声を、原発の声を聴くべきではなかろうか。捨てられる民の声に、放棄される土地の声に、あるいは死者たちの声に、われわれは耳を傾けねばならないのではなかろうか。

聴くことに力があるとは、しばしば語られることである。不安をもつ人は、聴いてもらうだけでそれが軽減する。これはわれわれも経験することである。そうであるならば、さらに聴く対象を広げてはどうであろうか。人間環境論は、聴くことをもっと強調するべきであろう。先に、人間環境を構成する4つの独立した領域について述べておいた。これら4つの領域を結びつけるものはコミュニケーションでありコミュニケーションで最も重要なことは、世間でよく言われる発信能力ではなく、ないしは、それに劣らず、聴く能力ではないか。こうした観点から、人間環境論をさらに発展させることが、今後の緊急の課題である。

【要約】 3月11日の東日本大震災と、その結果起こった福島第一原発の事故は、膨大な被害を引き起こし、いまだ、収束の目途がたっていない。これらは、われわれに今までの生き方や考え方に変更を迫る、根源的な問題を突きつけた。本稿では、人間の卑小さと傲慢について考え、人間環境論をさらにどのように発展させるべきかを探った。その際手がかりとなるのが、原発「制度」とも言うべきものの存在であり、そのうえで、特に教育との関わりで、「聴くこと」の重要性に辿り着いたのである。